

Scenarios as a Problem-Solving Tool for Intercultural Communication: Comparison of Scenarios and Describe-Interpret-Evaluate Analysis

Riko WAKITA

Abstract

This article considers a scenario analysis as a valid problem-solving tool to develop intercultural communication competence, using the Describe-Interpret-Evaluate (D-I-E.) analysis. It is unexpectedly difficult to fairly and equitably judge cross-cultural happenings. Therefore, we have adopted the D-I-E. analysis. However, some students in my cross-cultural studies class often face difficulty in using this analysis; therefore, I have introduced a new problem-solving tool, scenario analysis, for facilitating intercultural communication in my class.

The procedure of the D-I-E. analysis is as follows. (1) Students read the text explaining a cross-cultural conflict; (2) They divide the text into several descriptive parts and note down each description “Describe” in the D-I-E. table; (3) They imagine the personal feelings in each description and write down what they “Interpret” and “Evaluate” of their culture in the right column of the table; (4) They imagine the personal feelings and write down what they “Interpret” and “Evaluate” of the other culture in the left column of the table. It seems that some students are perplexed by the fourth step because they hardly imagine the other culture.

The procedure of the scenario analysis is as follows. (1) Students read the text explaining a cross-cultural conflict; (2) They imagine the characters and contrive a plot of their own story through freewheeling thinking; (3) They write down the scenario including the title, characters, place and time, stage directions, and lines in the format sheet; (4) They make their scenario story presentations in groups and discuss the story and cross-cultural conflict with their classmates. Most students seem to enjoy the process

because they can positively pleasant the characters and stories based on their own experiences.

There are some differences between the D.-I.-E. and the scenario analyses. First, in terms of content, in the D.-I.-E. analysis, the students mainly imagine and write the characters' feelings, that is, they "Interpret" and "Evaluate." In contrast, in the scenario analysis, the students create a story using visual expressions, that is, the stage directions and lines, not using feeling expressions. Second, in terms of procedure, in the D.-I.-E. analysis, the students describe it using personal external aspects over personal internal aspects. In contrast, in the scenario analysis, they describe it using personal internal aspects over personal external aspects. Third, in terms of diversity of output, in the D.-I.-E. analysis, outputs are expected to be similar to model answers, whereas, in the scenario analysis, the outputs are expected to be diverse.

Although these two analyses assume different approaches, they are valid problem-solving tools that solve cross-cultural conflicts and reject ethnocentrism. For beginners, it would be better to use the scenario analysis initially and then to go on use the D.-I.-E. analysis.

Key Words: Intercultural Communication, Cross-cultural Conflict, Describe-Interpret- Evaluate Analysis, Scenario

異文化理解における問題解決ツールとしてのシナリオ

— D. I. E. 分析との比較を中心に —

脇田里子
同志社大学

キーワード: 異文化理解、異文化摩擦、D.I.E.分析、シナリオ

1. はじめに

日本学生支援機構によれば、2015年5月1日現在、日本で学ぶ外国人留学生（以下、留学生と略す）は208,379名で、年々、留学生数は増加している¹。在学段階別留学生の中で学部留学生は67,472名と最も多く、大学院留学生は第3位で41,396名である。しかし、キャンパスに留学生が増えたからと言って、それだけで大学のグローバル化が進んだとは言い難い。大学は留学生に対して、日本語科目だけでなく、日本の文化や異文化理解に関する科目も開講し、留学生を科目履修面から支援している。

とりわけ、後者の異文化理解に関する科目では、文化背景が異なる人々と共生していくための基礎的な知識、オープンな心と態度を学習し、コミュニケーション活動への積極的な参加行動が実践されている。言い換えれば、異文化間の誤解や摩擦が生じた場合を想定し、それらを解決できるように、相手を理解しようとオープンな心で接し、自分の考えを相手に伝えるためのトレーニングを行うことが多い。例えば、異文化摩擦の事例を挙げ、状況を分析すること、自分の考えを相手に効果的に伝えるアサーティブ・コミュニケーションの方法を学ぶこと、相手の話をじっくり聴く（エポケー）方法を学ぶことなどである。

¹ （独）日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」のWebページによる。

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/

本稿では、異文化理解に関する科目の中で、文化背景が異なる人と接し、違和感をもった時や、誤解や摩擦が起きた時に、学習者がその状況をどのように捉えることができるかという点に焦点を絞って論じる。この点に焦点を絞る理由は、異文化の問題を解決する第一段階として、つまり、異文化間の誤解や摩擦の原因を突き止めるためには、まず、何が起こったのかという事実関係を正しく判断することが重要であるが、それが意外に難しいからである。例えば、「近づいた」という事実を描写する時に、事実のみを客観的に描写するのではなく、「印象付けようとして近づいた」や「近づき過ぎた」など価値判断を含む描写をしがちである（八代他, 2010: 138、傍点部は原文のまま）。

異文化間の誤解や摩擦を分析する方法として、「Describe-Interpret-Evaluate（以下、D.I.E. と称す;ディー・アイ・イー）分析（八代他, 2001; 八代他, 2009; 八代・世良, 2010 など）」がよく利用されている²。しかし、学習者の中からは D.I.E.分析は難しいという声も聞かれる。そこで、新しい問題解決の方法としてシナリオを挙げ、その有用性を示すことが本稿の目的である。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 章にて、D.I.E.分析の方法と異文化摩擦事例を分析し、D.I.E.分析をする上での学習者の困難な点を説明する。次に、第 3 章にて、D.I.E.分析を補う方法としてシナリオに着目し、シナリオの作成方法とその異文化摩擦の分析を示す。そして、第 4 章にて、D.I.E.分析とシナリオによる異文化摩擦分析の特徴を比較する。最後に、第 5 章にて、異文化摩擦の問題解決ツールとしてのシナリオについてまとめる。

² グディスカント (1993: 243) によれば、D.I.E.の最初の提唱者は Berlo, D. の *The Process of Communication*, New York: Holt, 1960. であろうと述べている。なお、D.I.E.の日本語での名称については、八代他 (2001) では「D.I.E.メソッド」、八代他 (2009) では「DIE 法」、八代・世良 (2010) では「D.I.E.判断保留」と、日本語表現に若干の違いが見られる。本稿では「D.I.E.分析」と称す。

2. D. I. E. 分析

2.1 D. I. E. 分析の方法

異文化間で誤解や自文化中心主義に陥りやすい原因として、八代他(2009: 230)では、次の2つを挙げている。1つは、事実がしっかりと把握されないまま、憶測を基に解釈や評価を急ぎ過ぎること、もう1つは、その解釈や評価が相手のことを十分理解しないままになされることである。そこで、誤解や自文化中心主義が絡むトラブルが発生した時の解釈や未然防止の対策として、D.I.E.分析を挙げている。

D.I.E.分析は、次の3つのステップを経て分析される(八代他, 2009: 231、傍点部は原文のまま)。そして、ステップ1からステップ3の分析結果を表にまとめる。

(ステップ1＝事実の描写; Describe)

できるだけ多くの情報を集め、正確に、かつ、意味づけせずに、事実のみを書き出す。まずこの事実の描写を客観的にしっかり行うところが肝要だ。

(ステップ2＝解釈; Interpret)

描写した事実1つ1つに意味づけをする。なぜそれがなされたのか、どういう意味があるのかを考える。ただし、解釈は決して1つではない。できるだけさまざまな立場で解釈を試みるのが大切だ。

(ステップ3＝評価; Evaluate)

できるだけ性急な判断を避けたい。分析の際は1つの事実(誰かの行動)への評価は解釈の数だけ考えるようにする。別サイドの立場からの解釈とそれに伴う評価を考えていくと、もう性急で身勝手な評価はできなくなるはずである。

2.2 異文化摩擦事例の分析

次に、D.I.E.を使って具体的に分析するために、異文化摩擦の事例とその分析(八代他, 2009: 234-236)を挙げる。表1は<事例1>を読んで、D.I.E.分析したものである。(なお、事例の中の【A】【B】はシナリオの出題と比較するために、筆者が便宜的に付加したものである。)

<事例1>

アメリカの大学院に留学中のさなえさんは、その学期、学生寮で韓国人留学生のキムさんと同室になった。その寮は大学院専用で二人部屋なのだ。部屋には小さな冷蔵庫も1つ備え付けになっていた。二人で共同で使うようになっていく。さなえさんとキムさんも、飲み物やちょっとした食べ物をいつも入れていた。それぞれ自分で買ったものを冷蔵庫にしまっていた。ある日、さなえさんは他の日本人留学生にこんなことをもらした。「同室のキムさんが時々勝手に私の牛乳などを飲んでしまう。自他のものを区別できない人と同室になってしまって困っている。注意するにも何ともなく角が立ちそうで、全く気分が悪い。」それを聞いた友人も、キムさんの常識の無さを批判した。【A】

しかし、結局、さなえさんは何も言わず、その学期は何となく気まずいままその部屋で過ごし、次の学期は他の理由をつけて部屋替えをしてもらった。【B】

表1 <事例1>のD. I. E. 分析 (八代他, 2009: 236)

さなえさんの視点での評価	さなえさんの解釈	事実の描写	キムさんの解釈	キムさんの視点での評価
(この時点ではこれといった評価はない。)	韓国人のことはよくわからない。	日本人と韓国人の留学生同士が学生寮で2人部屋の同室になる。	あまり日本人については詳しくない。	(この時点ではこれといった評価はない。)
飲料物の所有関係を明確にすることは友情にひびを入れないためにも大切である。	冷蔵庫は共有でも、中の飲料物は個人個人の所有物である。きちんと区別しておきたい。	共同の冷蔵庫に、それぞれ自分の買ったものを入れておく。	中の飲料物は個人の所有物である。しかし、貴重品と違い、分け合ってもよい。	飲料物の所有関係を明確にすることは重要ではない。冷蔵庫の中のものを共有することはいいことである。
どういった家庭教育を受けてきたのか？ 人のものに無断で手を付けるのは非常識、犯罪である。	キムさんは他人のものと自分のものを区別しないところがある。	キムさんは、時々さなえさんの牛乳などを飲む。	さなえさんとの距離を無くすため、親しみを表すために、意識的にさなえさんのものを飲んだ。	飲料物を多少共有することは友情を育むためにも良いことである。
自他の所有を区別し、他人のものに手を付けられないことは人間の基本ルールである。	自他のものははっきり区別したいので、キムさんのものは飲まない。	さなえさんは自分のものしか飲まない。	私とあまり親しくなりたくないのかもしれない。	さなえさんは少しよそよそしい。
忍耐はよいことである。事を荒立てるのはよくないので、自分のしていることは正しい。	苦情を言うとう関係が悪くなるかもしれないので、言えない。今学期だけ我慢しよう。	さなえさんはキムさんの行動に内心反感を抱きながらも何も言わなかった。	さなえさんは何とも思っていないのだらう。でも、何だかさなえさんとは気まずくなってしまった。	やはり日本人は韓国人に偏見があるのだ。

2.3 学習者にとってD. I. E. 分析の困難な点

学習者はこうした異文化摩擦の事例を読み、空白の D.I.E.表を埋めていく練習をしていく。しかし、次のような困難を感じる学習者がしばしば観察される。

- (1) 異文化摩擦が生じた出来事を複数の「事実」に分けること
(2～3 つの「事実」に分けると、1 つの「事実」の描写が長くなる。)
- (2) その「事実」をありのままに描写すること
(主観的な表現を伴った「事実」を描写しがちである。)
- (3) 「解釈」と「評価」の違いがわかりにくいこと
(同じような表現を使って「解釈」と「評価」を記述してしまう。)
- (4) 異文化側の「解釈」や「評価」を察すること
(異文化側の「解釈」や「評価」は空白のままになっている。)

このような状況に対して筆者の授業では次のように対応している。まず、(1) ～ (3) の困難が生じる原因としては、学習者がこうした分析方法に慣れていないことが挙げられる。よって、学習者自身に分析させる前に、教員は複数の D.I.E.分析例を示す必要がある。(1) については、その事例を 4～5 つの「事実」に分け、導入、展開、結果の三部構成で書くことが望ましいことを示す。(2) と (3) については、「事実」は「誰が何をした、何がどうなった」を、「解釈」はその時の人物の「気持ち、疑問、推測」を、「評価」は「解釈」を発展させた「感情、価値観」を記すことが期待されることを補足している。そして、「事実」から「解釈」へ、「解釈」から「評価」に向かうに連れ、客観性から主観性が強く占める書き方になっているか確認する。確かに、日常生活の中で、ある出来事のある行為を 3 つのステップに分けて分析する経験はないため、こうした練習を繰り返し、習得していくしかない。

次に、(4) の困難が生じる原因としては、一般的に、自文化はよくわかるが、異文化がよく理解できていないためだと言われている。この点については、まず、学習者自身で異文化側の「解釈」や「評価」を

考え、その後、グループで異文化の立場について議論する、可能であれば、日本人学生を招き意見を述べてもらうなどして、異文化側の「解釈」や「評価」について、様々な考えを学ぶ機会を提供している。

また、近年、初年次の学習者に見られる特徴として、日本の生活であまり文化摩擦を感じていない、つまり、自文化と異文化の境界が低くなっている傾向がある。そのため、日本人との異文化摩擦の事例に描写されている自文化側の言動に賛同できないという学習者もしばしば見受けられる。授業の中で、来日後、日本での異文化体験について、とりわけ、日本に来てから不愉快な気持ちや嫌な思いをしたことはないか尋ねると、大半の学習者からは、日本は清潔、安全で、日本人は親切で、嫌な思いをしたことはないという答えが返ってくる。また、2.2 の〈事例 1〉で示した「親しい間柄であれば、相手に事前に断らなくても、ジュース位飲んでも構わない」（中国や韓国では一般的な行為と言われている）という考えに賛同するかどうか、クラスで挙手を求めると、例年、半分以下しか挙手が見られない。多数を占める若い中国や韓国の学習者は、個人差もあるだろうが、日本の生活習慣や文化にかなり同調しているように見受けられる。中には、〈事例 1〉を読んで、この韓国人は礼儀知らずで、おかしい、この事例は韓国人を間違って表現していると怒り出す学習者もいた。そこで、こうした事例に示される〇〇人に、自分を当てはめるのではなく、外国で生活した経験がなく、その国の典型的な価値観をもった人と読み替えてほしいと補足説明を加えている。

さて、筆者はこうした D.I.E.分析の実践を積み重ねているが、1 つの事例を 3 ステップで詳細に分析し、特定の「事実」から両者の「解釈」や「評価」の違いを明確にする D.I.E.分析は、とりわけ、初年次の異文化摩擦の状況分析に慣れていない学習者にとっては、負担が大きく感じられる。ある場面の事例分析をする場合、一方の文化の言動の「解釈」や「評価」が予想もつかなければ、分析もできないこともある。また、同じ異文化摩擦の事例であっても、学習者によって、その言動や感じ方は千差万別で、同じ結果に至らないことも多い。そこで、D.I.E.

分析よりも先に、まず、その異文化の状況において、学習者はどうするか、考えてみてはどうだろうか。例えば、教員がある異文化の対立場面を設定し、学習者は、その場面で、その人物が何を語り、どう振る舞ったかについて、自由に想像して書くことによって、その場面の理解が進むと考える。しかし、小説や物語のように、登場人物の連綿たる心情を書き、読み手に伝えることは一般の学習者には難しい。そこで、比較的、誰でも簡単に描写できる方法として、本稿ではシナリオに注目する。

3. シナリオによる異文化摩擦の分析

3.1 シナリオの定義

シナリオはテレビドラマや映画などの脚本で、場面の構成や人物の動き、セリフなどが書かれた映像にすることを目的にした文章である（新井・原島, 1987; 新井, 2010; 新井, 2013 など）。映像にすることを目的にしているということは、映像にできない表現はシナリオには書けないということである。例えば、人物が心の中で思っている心理描写は、心理描写のままでは映像にできないため、後に示す「柱」、「ト書」、「セリフ」で表現することによって、視聴者にその人物の心理を推測させる。そこが、小説や物語といった文学作品と最も大きく異なる点である。また、シナリオは特別なトレーニングを積んだプロだけのものではなく、シナリオは誰でも書けるものであり、努力してシナリオの基礎技術を身につければ、誰でもシナリオライターになることができるという（新井, 1985: 9）。よって、シナリオの技術と発想をうまく利用すれば、異文化間の問題を解決するツールになると考えている（新井, 2013; 脇田, 2014）。

では、シナリオ執筆に必要なものは何かというと、(1)「伝えるための技術」と(2)「話の発想」とであるという（新井, 2013 など）。

(1) 「伝えるための技術」

- ① 「タイトル」
- ② 「登場人物の設定」 (氏名、年齢、職業など)
- ③ 「柱」 (場所や時間)
- ④ 「ト書」 (人物の動作、仕草、表情など)
- ⑤ 「セリフ」

(2) 「話の発想」

想像力 (人を見る目、ものを見る目、社会を見る目)

学習者はシナリオを執筆する上で、(1) の 5 つの技術を用い、(2) の想像力を駆使して創作できる。しかし、(2) の登場人物の設定からストーリーの展開までを学習者一人で考えることは容易ではない。そこで、教員がある程度、異文化の状況設定をして、学習者がその状況の中で話の続きをシナリオで書くように指導している。

3.2 シナリオによる分析

図 1～図 3 は、＜事例 1'＞ (2.2 の＜事例 1＞の後半部分 **【B】** を **【C】** に置き換えたもの) の後の話の続きをシナリオで作成したものである。

(図 1 は教員がサンプルとして作成したもの、図 2 と図 3 は学習者が作成したものである。)

＜事例 1'＞

(＜事例 1＞の **【A】** と同じ。ここでは **【A】** の本文は略す。)

ある日、部屋に戻ってきた早苗さんは、冷蔵庫に入れている日本から送ってもらったプレミアム・ジュースを取り出して飲もうとした。そして、まだ、開けていないジュースが半分くらいなくなっていることに気づいた。早苗さんは、今日という今日は、一言言っておこうと思った。台所では、キムさんがテーブルで食事をしていた。**【C】**

図1 シナリオによる異文化摩擦分析1

1 『私の飲み物はあなたのもの?』

人物
早苗 (♀) 日本人留学生・女性
キム (♀) 韓国人留学生・女性

○アメリカの大学院の国際学生寮(夕方)

共同の台所で、唐揚げを作っているキム。
これから夕食を作ろうと、冷蔵庫をのぞく早苗。
早苗「あれ、私のジュース。まだ飲んでいないのに、半分なくなっている。」
早苗はキムの方を見る。キムはフライパンの中を見ながら、
キム「ああ、そのジュースなら、のどが渴いたから、さっき飲んじゃった。と
ってもおいしかったよ。」
早苗、目を大きく開いて
早苗「え〜っ。」
早苗は口をあぐり開けた後、眉をひそめてキムを見る。
キム、悪びれた様子もなく、揚げたての唐揚げの味見をしながら、
キム「だって、友達でしょ。」
早苗、急に大きな声で、
早苗「友達ですって。」
キムは早苗の大声に、驚いて、一度振り向くが、すぐに唐揚げの揚げ加減を見ている。
早苗、不満を口にしようとしたが、
早苗「もういい。」
早苗は声を荒げて、台所のドアをガチャンと閉めて出ていく。

1 タイトル
2 人物設定
3 柱(場所・時間)
4 ト書(動作など)
5 セリフ

図2 シナリオによる異文化摩擦分析2

2 『うそじゃない?』

人物
早苗 (♀) 日本人留学生・女性
キム (♀) 韓国人留学生・女性

○アメリカの大学院の国際学生寮(朝)

キムがパンケーキを食べている。
そこに、早苗が入ってくる。
早苗「おはよう。」
キム「おはよう。」
早苗が、ジュースを出して振りながら、
早苗「あらーっ。このジュース、開けていなかったのに、半分がなくなっている。おかしいね」
キムが慌てて
キム「あー、言おうと思っていたけど、忘れてしまった。ごめん。私が飲んじゃった。」
早苗、腕を組んで、
早苗「そうだと思った。いい加減にしてくれないっ。この前も私の牛乳とか、飲んだでしょう?」
キム、重苦しい顔で、
キム「そんなこと、ない。今回が初めてなんだ。信じて。本当ごめん。」
早苗は疑わしい顔つきをして、
早苗「この嘘つき。もう二度と見たくない。寮長に言って、ルームメイトを変えてもらおう!」

図3 シナリオによる異文化摩擦分析3

3 『あなたの世界を構成する塵のような何か』	人物
早苗 ⑧ 日本人留学生・女性 キム ⑧ 韓国人留学生・女性	
○アメリカの大学院の国際学生寮(午後)	
キムがホットドックを食べている。 そこに、早苗が入ってくる。	
早苗「キムさん、あの、冷蔵庫においてあったわ・た・し・のジュースを飲んだのはキムさんでしょう。」	
キム「丁寧にホットドックの中にキムチを入れながら、 賞味期限がもうすぐすぎるから、半分飲んでやったのよ。」	
慌ててジュースの賞味期限を確認する早苗、 早苗「うそ。」	
賞味期限はまだ1週間もあることを確認して、 早苗「まだ、1週間もあるじゃないですか。今夜、お風呂に入ってから飲もう と思っていたのに。」	
いたずらが見つかった時のような笑顔のキム 早苗「そうだと思った。いい加減にしてくれないっ。この前も私の牛乳とか、 飲んだでしょう？」	
キム、重苦しい顔で、 キム「ごめん、ごめん。おいしそうだったから、つい。」	
拗ねるような不機嫌そうな早苗、 早苗「今度から、人のものを取る前に先に言って。じゃないと部屋を代わるか ら。」	
キム「はい。」	

図1の分析では、キムは友達の飲み物を勝手に飲むことに悪びれた様子はなく、早苗はそれに怒って、決裂した。図2の分析では、キムは勝手に飲んだことを謝ったが、早苗はそれを許さない。図3の分析では、キムが勝手に飲んだことに対して謝ったので、早苗は今回は許すことにした。このように、同じ場面であっても、学習者ごとに、登場人物間の人間関係の設定、登場人物のキャラクターとその言動、最後の結末は多様である。異文化の問題と言えない結末に至る分析もあるが、学習者がその場面をどのように理解しているかを表現することが重要である。授業では、その後、学習者個人のシナリオによる分析結果をグループ内で示し、そのような言動や結末に至った理由を話し合うことで、異文化に対する理解を深められるだろう。

なお、シナリオによる分析の問題点としては、学習者によっては、登場人物のキャラクター設定や「ト書」や「セリフ」の表現に悩み、

なかなか筆が進まない場合もある³。しかし、そうした場合、学習者にアドバイスをすれば、短くとも書いていることが多いため、シナリオは学習者にとって比較的取り組み易いようである。

4. D. I. E. 分析とシナリオによる分析の比較

表 2 は、表 1 の D.I.E.分析と図 1～図 3 のシナリオによる分析を比較し、共通点と相違点をまとめたものである。

表 2 D. I. E. 分析とシナリオの分析の比較

共通点		1 異文化摩擦における誤解や自文化中心主義を解決すること、未然防止につながる。	
		2 異文化摩擦の生じた二者の立場について、双方向から考え、分析する。	
相違点	観点	D. I. E.	シナリオ
	1 初心者への取り組み易さ	やや難しい	取り組み易い
	2 分析する内容	「事実」の描写、 「解釈」「評価」の心情表現	「セリフ」「ト書」「柱」は映像で再現できる表現
	3 分析の手順	まず「事実」を分析し、次に「心情」を推測（人間の外面から内面へ）	まず、人物や場面を設定し、次に、ストーリーを創作（人間の内面から外面へ）
	4 分析の困難点	客観的な「事実」の描写、「解釈」と「評価」の相違点	人物のキャラクター設定、ストーリーの展開
	5 分析結果の多様性	模範解答と同じ結果になることが期待される	模範解答はなく、多様な言動や結末が期待される

表 2 から、どちらの分析も、一方の文化だけではなく、他方の文化からも分析し、摩擦の起きた状況を再現し、その状況をもう一度考える機会を与えている。そのため、異文化摩擦における誤解や自文化中心主義を解決すること、さらには、未然防止につながる問題解決ツールと言えよう。

³ 人物のキャラクター設定、「セリフ」や「ト書」表現については、学習者によって反応が大きく分かれる。苦悩する学習者がいる反面、嬉々として、キャラクターを設定し、「セリフ」や「ト書」を書いていく学習者もいる。

相違点については次の 5 つの観点から述べる。まず、第 1 点は、初年次などの初心者に対する取り組み易さである。現在までの授業実践から判断すると、D.I.E.分析よりシナリオの方が取り組み易い。その根拠として、第 2 点から第 3 点に示す、分析の内容や手順に関して、シナリオの方が学習者の課題に対する反応がよく、課題プリントの空白の箇所が少ないためである。シナリオ作成において学習者の反応がいいというのは、登場人物については〇〇人という大まかな設定はあるものの、キャラクターやセリフは自由に設定できるため、学習者が積極的に取り組んで、書こうとする意志が感じられることなどを指す。

次に、第 2 点は、分析の内容、つまり、何を書くかについてである。D.I.E.分析について、「事実」は事実を描写し、「解釈」「評価」は心情表現を書く。しかし、シナリオは、心情を書くことはできず、映像で再現できる表現のみで書く。同じ場面の分析であっても表現する内容が大きく異なる。

そして、第 3 点は、分析の手順についてである。D.I.E.分析では「事実」を描写し、そこから両者の「心情」をそれぞれ推測していく。一方、シナリオは人物や場面を設定し、その後、ストーリーを自由に創作していく。分析の方向について、D.I.E.分析は人間の外面から内面へ、シナリオは人間の内面から外面に向かうという点で異なる。

さらに、第 4 点は、分析上の困難な点について述べる。D.I.E.分析では客観的な「事実」の描写、「解釈」と「評価」の相違など（2.3 にて詳述）を書き分けることである。他方、シナリオは人物のキャラクター設定やストーリーの展開に時間が要する学習者もいることである（3.2 にて前述）。

最後に、第 5 点は、分析結果の多様性について示す。D.I.E.分析では、模範解答例と同じような結果になることが期待される。が、シナリオでは、模範解答はなく、多様な言動や結末が期待される。

以上、D.I.E.分析とシナリオによる分析は、異文化間の誤解や摩擦の解決、さらには、未然防止として有用であることを示した。授業でD.I.E.分析のみを取り上げる場合、D.I.E.分析に難しさを覚える学習者が少なからずいる。その場合は、まず、学習者が異文化摩擦の状況を理解するために、学習者にシナリオを作成させ、グループ内の学習者間で読み合い、異文化側の立場などについて議論してはどうだろうか。その後、D.I.E.分析に取り組めば、2.3 で挙げた D.I.E.分析の困難な点である (2)「その「事実」をありのままに描写すること」や (4)「異文化側の「解釈」や「評価」を察すること」の問題点は解決しやすくなるだろう。

また、D.I.E.分析とシナリオによる分析は、「分析の内容」「分析の手順」「分析結果の多様性」の点からは対照的なアプローチをとるため、2 つの分析を経た方がより深く異文化摩擦の状況を理解できると思われる。

5. まとめ

本稿では、異文化間の誤解や摩擦を分析する新しい問題解決ツールとして、シナリオに着目し、D.I.E.分析とシナリオによる分析を比較しながら、その有用性を示してきた。異文化間の誤解や摩擦の原因を突き止めるためには、まず、何が起こったのかという事実関係を正しく判断することが重要であるが、それが意外に難しい。従来、こうした問題を解決する方法として、D.I.E.分析が採られているが、学習者の中からはD.I.E.分析は難しいという声も聞かれる。D.I.E.分析は与えられた状況に対して、学習者が当事者の「事実」を切り分け、そこから「解釈」「評価」を推測していくが、学習者は当事者の「解釈」「評価」に共感できないこともある。

そこで、学習者が当事者間の状況や結果を創作し、まずは学習者がその異文化の状況を想像し、自分なりに理解し、その後で意見交換することが望ましい。そうしたことができるツールとして、本稿ではシナリオを取り上げた。また、D.I.E.分析とシナリオによる分析は、対照的なアプローチであるため、2つの分析を経た方がより深く異文化摩擦の状況を理解できると思われる。

今後、D.I.E.分析とシナリオによる異文化摩擦の分析の実践を重ね、さらなる有用性の検証を課題としたい。

参考文献

- 新井一（2010）『シナリオ作法入門』 映人社
- 新井一・原島将郎（1987）『シナリオの基礎Q&A』 ダヴィッド社
- 新井一樹（2013）「活動報告「1億人のシナリオ。」プロジェクトー多文化間コミュニケーションにもシナリオー」 『月刊シナリオ教室』 2013年9月号, 56-57.
- W. B. グデイスカント、ICC 研究会訳（1993）『異文化に橋を架けるー効果的なコミュニケーションー』 聖文社
- 八代京子・荒木晶子他（2001）『異文化コミュニケーション・ワークブック』 三修社
- 八代京子・町恵理子他（2009）『異文化トレーニング 改訂版』 三修社
- 八代京子・世良時子（2010）『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』 三修社
- 脇田里子（2014）「シナリオ執筆による異文化コミュニケーション力の育成」 『コミュニカーレ』 3, 31-59.

出所：

第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集委員会編
『日本語教育と日本の研究におけるイノベーション及び社会的インパクト』、香港日本語教育研究會、2017年7月